

してください。

**伊奈副院長**／抗がん剤を投与する場合、しっかりとしたエビデンス(治療効果が裏づけされていること)に基づいた化学療法が行われることが重要です。

当院の外来化学療法室では、抗がん剤に対する豊富な知識と経験のあるがん専門医3人と薬剤師、看護師で構成されている「がん化学療法プロトコル委員会」が厳密な審査で承認したプロトコル(抗がん剤)しか使っていません。

**Q.** それぐらい慎重な検討をしたうえで投与しているということですね。外来化学療法室のほかにどんな組織がありますか。

**伊奈副院長**／がん相談支援センター、緩和ケア・チーム、がん登録室を設置しています。

がん相談支援センターは、ソーシャルワーカーや薬剤師や看護師が、がん患者さんが直面している日常生活の悩みや苦しみ、医療費や食事のほか抗がん剤の副作用など、がん医療に関するすべてのことについて相談を受けています。

**Q.** そうした相談をどのように生かしていますか。

**伊奈副院長**／がん相談支援センターでは、そうした患者さんからの相談に対して最善の対策や治療は何かよいかを検討してがん診療に役立てるとともに、相談の中で培った情報をがん患者さんに開示し、提供しています。

**Q.** がん患者さんの悩みや苦しみに対して的確な対応と、情報を提供しているシステムだということですね。

**伊奈副院長**／また、このがん相

談支援センターの大きな特徴としては、がん患者さんのNPO法人の協力を得て、ピア・サポーターが毎月1回、がん患者さんからの相談に対応していることです。

**Q.** ピア・サポーターとは。

**伊奈副院長**／ピア・サポーターとは、がんのサバイバー(長期生存者)で、半年間がんに関する研修を受けて相談員の資格を取得されている方々です。ピア・サポーターは、自分自身の闘病体験に基づいて相談に応じていただいているので、がん患者さんやご家族は、日常の悩みや苦しみを心おきなく相談ができるようです。

**Q.** がん医療では緩和ケアも大変重要ですね。

**伊奈副院長**／当院は「民間のがんセンター」を目指して開院しましたが、早くから緩和医療に関心を持っているスタッフはいました。しかし、緩和ケア・チームはなかったもので、2007年にチームとして組織しました。

**Q.** メンバーは。

**伊奈副院長**／医師(腫瘍内科医2人、診療

内科医1人)、臨床心理士、がん性疼痛認定看護師、薬剤師、栄養士、ソーシャルワーカーといった多職種から構成されており、さまざまな問題に対してチーム医療という形で、レベルの高い緩和医療が提供できるようになっています。これも当院のがん診療の大きな柱の一つになっています。

**Q.** 今後のがん診療に取り組む決意を披露してください。

**伊奈副院長**／愛知県がん診療拠点病院に指定されたことを契機に、さらに地域の方から信頼される、質の高いがん医療を提供することを目指します。

がん診療は高い専門性が要求されるとともに、まさに多職種の共同作業によるチーム医療そのものであり、全人的にがん患者さんを支えることが望まれます。

ヒト、モノ、カネとよく言われますが、その中でも人材は宝なので、医師はもとより看護師、薬剤師など多職種にわたるがん専門家の育成、人材育成に取り組んでいきたいと思っています。

